

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：33906

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23520407

研究課題名(和文) ムージルの演劇批評研究 価値評価の試みと『特性のない男』創作への影響分析

研究課題名(英文) The research on the theatrical critic by Robert Musil

研究代表者

長谷川 淳基 (Hasegawa, Junki)

梶山女学園大学・人間関係学部・教授

研究者番号：40198718

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：研究成果は以下のとおりである。ムージルの1920年代の演劇批評は第1次大戦後のウィーン
の精神状況の観察と批判である。それらの演劇批評は、往々にしてアルフレート・ケルの演劇批評を参照して執筆され
ている。ムージルの小説『特性のない男』もケルの演劇批評の影響のもとに生まれた。
ケルはムージルの「産婆」と称される。ムージルの処女作『テルレス』を激賞して、世に出したからである。しかしム
ージルの『特性のない男』がケルの批評をきっかけに生まれたことが明らかになった今、ケルはムージルについて二度
の産婆役を果たしたと言いうる。

研究成果の概要(英文)：The result of my research is the following.
The contents of the theatrical revues in 1920's by Robert Musil are observation and criticism on the
situation of spirits in Wien after World War I. They were often written under the influence from the
theatrical revues by Alfred Kerr. Even the novel "the man without qualities" could come into existence
with accepting the view of a revue by Kerr. Kerr is called usually the midwife of Musil, but we can now
therefor call Kerr "the midwife of Musil in two times", in the first time, as we knows, he brought him
into the world with the criticism on Musil's first novel, and in the second time when Kerr gave him the
inspiration to the big novel.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：ローベルト・ムージル アルフレート・ケル 特性のない男 演劇批評 性格のない男 ウィーン

1. 研究開始当初の背景

私は 1998 年頃より作家ローベルト・ムージルと演劇批評家アルフレート・ケルの関係を研究してきた。これによりムージルの主要作品、すなわち 1906 年の小説『テルレスの惑乱』、1920 年代の 2 作の演劇作品、さらに 1930 年の小説『特性のない男』の創作には、常にケルの存在が影響したことを明らかにした。1920 年代初頭の劇評家ムージルの 4 年間は、ムージルが改めて劇評家ケルを自己の対蹠者すなわち「特性のある男」、彼岸の男と意識化する時期であり、その時期は同時にムージルが『特性のない男』の構想を固め、執筆する時代であることに気付いた。

しかし、そこに存在するケルと『特性のない男』の間の深く、かつ長い関連を可視的なものとするためには、私のそれまでの研究を以下の 2 点において、論じ直さねばならないことに気付いた。1) ムージルの演劇批評を、同時代の演劇批評の第一人者であるケルの批評と比較し、より広い関連で二人の関係を分析すべきであること。2) 1920 年代前半、ムージルは自身がもはや戦前の意味での、すなわち多民族国家におけるオーストリア人あるいはウィーン人ではないことを自覚する。この自覚・認識の過程のドキュメントとして、ムージルの劇評が分析されねばならない。

研究の目標と範囲について記す。ムージルの演劇批評を同時代の演劇批評と比較し、その価値を正確に分析・理解することが本研究の第一の狙いである。そしてその作業の中で、言わばウィーン駐在のチェコ特派員ムージルによるウィーン演劇への批評のほとんどが、本国(新生チェコ)の読者向けに書かれたものであった点に注目し、それが小説『特性のない男』の着想に結びついているさまを考察する。

その他としてムージルの演劇批評の翻訳を試み、注釈付き翻訳本の出版を目指して準備を整える。

2. 研究の目的

(1) ローベルト・ムージルが、主に 1921 年から 1924 年の間に書いた約 80 本あまりの演劇批評を分析し、作家としてのムージルではなく、演劇批評家としてのムージルの評価判定を行う。

(2) ウィーンが「特性のない都市」としてムージルに意識化される過程については、演劇批評家としてのムージルの体験によるものである点を明らかにする。ムージルは第 1 次大戦後に演劇批評家として活動した。その 4 年間にわたる体験はムージルに、「性格のない男」や「特性のない都市・ウィーン」のモチーフを意識化させ、これが基になって小説『特性のない男』が生み出されたことを論証する

(3) 研究結果を、日本語とドイツ語の論文として内外に問う。

(4) ムージルのすべての演劇批評を、注釈付き翻訳本として出版する準備作業を整える。

3. 研究の方法

(1) 資料の収集と、それらの分析により計画を遂行する。

(2) 計画推進のために、国際ローベルト・ムージル協会からの支援を受ける。

(3) 同じく、ムージルの伝記研究家カール・コリーノとの研究協力関係を維持し、支援を受ける。

4. 研究成果

ムージルの演劇批評の特徴は以下の(1)から(6)である。

(1) 批評の特徴

(1)- ナショナリズム批判

ムージルの演劇批評の特徴として一番に指摘すべきことは、新生オーストリアのドイツ・ナショナリズム思想に対する批判である。第 1 次大戦の敗北によりオーストリア・ハプスブルク帝国は消滅した。その結果、新生オーストリアは地理的にほぼ現在の形となり、ドイツ語のみを公用語とする国となった。ムージルは、1920 年代の演劇批評において、この新生オーストリアのドイツ・ナショナリズムの思想を鋭く批判した。これについては以下の「5. 主な発表論文等」に記載の「論文 1. ローベルト・ムージルのウィーン演劇批評について ハンス・シュティフテッガーとアントン・ヴィルトガンス批判」において分析し、公表した。以下、概要を記す。ハンス・シュティフテッガーの民衆劇「ラックス山」は大当たりした。大当たりの様相は、何よりも観客の熱狂ぶりと、演劇批評家からの賛辞に現れていた。ムージルの批評はこの作品にドイツ・オーストリア山岳協会が掲げる「ユダヤ人排斥条項」に重なる思想的な偏狭さを察知し、指摘している。ヴィルトガンスの「カイン」についてのムージルの批評は、その同じ偏狭な思想がブルク劇場監督人事と表裏一体をなす点に焦点を当てて批判をつづっている。すなわち、カトリック主義を標榜するヴィルトガンスの文学はウィーンの観客の支持を獲得しただけでなく、ブルク劇場監督の地位をも彼にもたらした。ヴィルトガンスの文学の底の浅さとそこに認められる美的感覚の鈍麻について指摘しながら、ムージルはウィーン演劇界とこれを支える政治勢力を批判した。

ベルリン演劇界を席卷するマックス・ラインハルトに対するウィーン演劇界の姿勢ないしは考え方についても、ウィーンの反ユダヤ主義は貫かれた。ラインハルトの演劇には概して共感を示さないムージルであるが、ウィーンの反ユダヤ主義が問題になる場合にはムージルは決まってラインハルトの側に立ち、ウィーン人を非難する批評をつづっている。

「モスクワ芸術座」を始めとするロシア演

劇人へのムージルの深い共感も、こうした面との関連で理解すべきである。すなわち、ロシア革命、社会主義制度へのムージルの共感、戦後オーストリアの体制批判の裏返しと理解することができる。これについては「論文4.ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル 「モスクワ芸術座」批評」ならびに「論文5.ローベルト・ムージルの演劇批評 『ロシア演芸』と『モスクワ寄席』」としてまとめ、公にした。ユダヤ演劇人への共感、ベルリン演劇人、特に演出家への共感もそうしたムージルの思想の反映として理解しうる。このベルリン演劇界への共感については、本年3月中旬に書き終えた「ドイツ語論文」で言及している。

(1) ウィーン演劇界との対決 ムージルは浅薄さ・理解力の欠如を指摘する

ムージルはその批評においてウィーン演劇界全般を覆う理解力・審美眼の浅さと表裏一帯をなすものとして、この点を告発している。

ウィーンで芽が出なかった俳優がベルリンで成功している例をムージルは繰り返し指摘する。その他、ベルリンからやってくる演劇人にウィーンが嫉妬めいた冷淡さを示すことも、ウィーンの特徴であることをムージルは指摘する。

ムージルは演劇を鑑賞し、評価を下す際に新しさの有無を大きな基準にしている。その結果としてシェークスピアやゲーテへのムージルの批評は一読して歯切れが悪さを感じる。この点については「論文3. ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル マックス・ラインハルト演劇への批評について」で分析し、公表した。すなわち、そうした古い演劇には、作品の再解釈あるいは演出が重要であり、そうしたことで新しさが生ずるとムージルは考えている。当代の大家ハウプトマンをムージルが忌避する理由も、こうした観点からすると容易に理解しうる。

(2) 批判の後ろ盾 ケルからの影響

こうした大胆な趣旨の、かつウィーン演劇界全体を批判するムージルの演劇批評の支えとなったのがアルフレート・ケルの演劇批評である。ムージルの演劇批評はアルフレート・ケルに依拠するところが大きい。甚だしい場合には、ケルからの剽窃・盗用と見なされかねない箇所もムージルの批評に指摘できる。

その例として、シェークスピア批評におけるムージルとケルの論点の一致を、「論文2. ローベルト・ムージルのシェークスピア批評 アルフレート・ケルの影響について」で書いた。ケルは、シェークスピア劇で展開されている論点は、現代社会においてはすでに克服されており、意味を持たない、と繰り返し主張している。ムージルはケルのこの意見を受け入れている。その上で、ムージルはシェークスピア劇を論じるたびに、そのつどの話

題に関してケルのシェークスピア論をなぞっている。「ロメオとユリア」批評でムージルはモイッシー演じるロメオを「ハムレットの南国の兄弟」と解説する。ベルリンでムージルの批評に先立って発表されたケルの批評では、モイッシーのハムレットはイタリア語の縮小辞を付けて「ハムレッティーノ」と呼ばれている。ムージルはこの場合、ケルの批評を分かりやすく、しかしながらいささかインパクトに欠ける言葉に置き換えたにすぎない。オテロを演じたモイッシーを見てムージルはサルと特徴づけている。ケルはバッサーマンが演じたオテロを見て彼をゴリラと特徴づけている。華奢な体つきのモイッシーについて、ムージルはゴリラならぬサルと特徴づけた。その他、演出家イエスナー、俳優コートナー、女優ベルクナーらの批評について、ムージルの批評にケルからの影響を認めることができる。

また同じ論旨で、マックス・ラインハルト批評におけるケルからの影響について、「論文3. ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル マックス・ラインハルト演劇への批評について」で書いた。すなわち、ケルはラインハルトの演劇のことごとくを否定的に評価した。ただし、最近のゲーテの「シュテラ」だけは例外的に、極めて好意的な批評を書いた。理由はラインハルトがシュテラ初校を舞台に掛けたからである。夫が二人の妻と一緒に一つ屋根の下で暮らし行くという結末で幕になるシュテラ初校はゲーテの時代はもちろんのこと、1920年のヨーロッパでも非道徳な芝居である。ケルはこの上演を「人間的」と評して、ラインハルトを擁護した。ムージルもこの通りに、「人間的な瞬間」「飾り気を排した潔い作品」「道徳的な事件」とラインハルトを、ただ一度この時だけ絶賛した。

ムージルがアルフレート・ケルに依拠して劇評を書いた理由としては、第1に権威の傘の下(ケルは「批評界の法王」と呼ばれていた)に身を寄せる意味合いがあったと容易に推測できるが、第2にやはり両者の文学観の一致があったと考えるのが合理的である。ムージルは早い時期からケルの反権力的姿勢に深く共感するところがあった。そして、何よりも批評の影響力を知っていた。『テルレス』発表の際に、ケルがこの作品を絶賛する内容の批評文を書かなかったならば、ムージルが世に認められることはなかったと、ムージル自身が感じている。

(3) 批評への工夫と配慮

読み手についての意識と配慮 プラハの読者に向けたムージルの演劇批評

1920年代のムージルの演劇批評は、主にプラハの読者を意識して書かれている。この点は、ムージルの演劇批評を読むときにいつも念頭に置かねばならない。ムージルの政治的心情とプラハ人・チェコ人のそれとの交わり部分が彼の演劇批評に盛り込まれている。

ムージルの演劇批評に繰り返し出てくる厳しいウィーン批判のトーンは、このためである。このムージルのウィーン批判は、小説『特性のない男』の基本的なモチーフを生み出すことになる。第1次大戦前のウィーンに生きる特性のない男ウルリヒの着想、がそれである。この経緯については「ドイツ語論文」で言及している。

(4) その他の特徴。理科系作家への共感。人気作家への厳しい目

ムージルは自身が理科、数学の分野に長けた人間であり、その点で他の作家とは異なると自覚していたことが、ムージルの演劇批評で確認できる。すなわち、ムージルのビュヒナー批評にこの点の特徴が見て取れる。これについては、著書論文「ローベルト・ムージルの演劇批評 ビュヒナー作『ダントンの死』について」で論じ、公刊した。

他に、ジュール・ベルヌ作「ドクター・ノック」についての批評でも、ムージルは新しい型の喜劇としてこの医師を主人公にした作品を肯定的に評価している。

(5) 基礎資料の発見と整理

批評家ムージル、あるいは演劇批評家ムージルについて言及しているすべての研究者の業績から判断して、ムージルの演劇批評の対象作品のことごとくについて、その内容を把握した研究者は存在しない。この点に関連して以下、基礎資料の調査結果について記す。

オーストリア・ウィーン演劇博物館を訪問した成果に関して。ルイ・ヴェルヌイユ Louis Verneuil の『ママ』„Mama“に関する批評は、ムージルの80余の演劇批評で最も意義深い批評の一つと言えるが、この批評でムージルはこの劇作品と年齢について「26歳の娘」と記している。オリジナルからの翻訳台本(Drei Masken Verl.)ではヒロイン・ジャクリーヌは20才である。同博物館に所蔵されている台本は書き込みの状況から判断して、実際の上演に用いられた台本と推測できるが、その本ではヒロインの年齢が手書きの書き込みで24歳と訂正されている。ムージルの見た上演ではヒロインは26歳に設定されたということであろう。演劇批評の読み方に特殊な困難さが伴う一例である。これについては「ドイツ語論文」で言及している。

同博物館に Bisson の“Der brave Richter“ (Verlag von Albert Ahn, übersetzt v. Max Schönau, おそらくは1901年刊。ウィーンでは1901年9月6日に Theater in der Josefstadt 初演) が所蔵されている。ムージルの演劇批評と『特性のない男』の関係を考える上で決定的な意義を持つ作品である。ケルは Bisson のこの作品を Der garante Richter と記しているが、このタイトルでは本を見つけることができなかった。

ドイツ・コーブルク州立図書館を訪問した成果について記す。Die Ballerina des Königs

の上演用台本5部が所蔵されている。そのうちの所蔵整理番号で一番若い番号の本は複数ページが破り取られている。役者が台詞を覚えるために、該当ページだけの破り取り、自分のために用立てたと推測できる。上演台本には、こうした本に多数遭遇する。これまた、演劇研究推進の妨げとなる典型的な事例である。

ドイツ・ライプチヒ国立図書館を訪問した成果について記す。Dario Niccodemi: Der Schatten の上演用台本が所蔵されている。ただし、本図書館所蔵の本は、後の1941年のものである。この翻訳上演台本とムージルが見た1922年のものとの異動は、不明である。

その他の基礎資料について記す。Deutsche Allgemeine-Zeitung, Süddeutsche Ausgabe, Ausgabe für Groß-Frankfurt 紙でのムージルの演劇批評(7本、うち6本は同紙において初出)は確認できなかった。すなわちベルリン国立図書館や同紙の一部を所蔵しているテュービンゲン大学図書館の協力を得て、同紙の閲覧を目的とする調査を行なったが、該当する新聞の所蔵を確認することができなかった。ベルリンの Gedenkstätte Deutscher Widerstand の Bibliothek に所蔵されているはずの同紙も、閲覧のために同図書館を訪れたが「所在不明」であった。時間の経過とともに基礎資料の確認がますます困難になることが実感され、あらためて本研究の意義を認識する機会ともなった。

(6) 結論

本研究の目的は、小説「特性のない男」と演劇批評の関係について明らかにすることであった。研究の結果、ムージルの演劇批評の営みは小説『特性のない男』誕生に決定的な役割を果たしていることを明らかにすることができた。

すなわちケルの一本の演劇批評をムージルが知ったことが、特性のない男ウルリヒを着想するきっかけとなった。1905年の頃からムージルはアルフレート・ケルに変わるのではない強い信頼を寄せてきた。それが、1920年代初頭になって、ムージルが演劇批評の仕事を得ることにより、ケルを再度「師」あるいは「代父」と感じるに至る。

ムージルはケルの批評で「特性のない男」イコール「英雄(ヒーロー)」との人物設定を知った。そしてムージルが演劇批評家として日々ウィーンの反動的なイデオロギーと対決する中で、その人物は小説『特性のない男』の主人公へと熟成・成長して行くことになる。ムージルが演劇批評家として活躍したのは第1次大戦直後である。多民族国家の首都としてのアイデンティティを無自覚に放棄する状況を観察し、考察する格好の機会が、ムージルに与えられたわけである。演劇批評家すなわちジャーナリストとして、である。オーストリアは多民族国家の形態を放棄したのであったが、作家・演劇批評家ムージルにとって

の、最大の変化はドイツ人国家(ドイツ語のみを公用語とする国家)となったことである。国立ブルク劇場の使命もそれに沿うものへと変化して行く。ムージルはこの劇場の新たなイデオロギーを鋭く批判し続けた。この劇評家としての活躍の過程で「特性のない男」を第1次大戦直前の時期に立たせることは、ムージル自身の存在の必然であった。第1次大戦以前のウィーン、すなわち多民族国家の首都としてのウィーンでこそ、「特性のない男」の存在は可能であり、この男の活躍の真の可能性と意義が存在したからである。主人公ウルリヒの思想・行動は現に動き出している新生オーストリアへの批判であり、そのアンチテーゼとして、彼は小説を構想し、書いた。その意味で小説『特性のない男』は未来を志向した実験小説であった。

ケルはムージルの『テルレス』批評でムージルを世に送り、その役割からムージルの産婆と称される。しかし、ケルはムージルの畢生の大作『特性のない男』の誕生のきっかけとムージルのウィーン観察・研究の支えであり続けたことで『特性のない男』の中心モチーフの形成に決定的な役割を果たした。この役割はテルレス批評に劣るものではなく、そうであればケルはムージルの誕生に2度の産婆役を務めた、と評されるべきである。

以上の私の研究は、ムージルの最新の研究の不十分さを補うものであり、ムージル研究の前進に貢献するものと確信する。なお最新のこの方面の研究成果としては、Nicole Streitler: Musil als Kritiker, (Peter Lang) 2006 がある。ムージルの批評家としての仕事を概観してまとめた研究である。

以上の研究結果は、3月中旬にドイツ語論文としてまとめた。ドイツ語の表現はもとより内容全般について、ムージル研究家カール・コリーノの校閲を受けることができた。コリーノいわく「あなたの書いたこのドイツ語の論文を、もしも私自身が日本語で書くことができたならば、私は大いに自慢に思うにちがいない」とのことである。現在、投稿先について検討している。

翻訳作業について記す。ムージルの演劇批評の解説付き翻訳出版について、準備をすすめている。ただし、ムージルの演劇批評のすべてを翻訳出版することは難しいと考えている。その理由は、批評の対象となった劇作品についての詳細が不明なためである。Walter Eidlitz: Der Kaiser im Walde, Hedwig Rossi: Sieben Jahre und ein Tag などが一例であるが、Charles Vildrac: Le Paquetbot Tenacity もドイツ語劇について詳細がつかめなかった。すなわちフランス映画版から受ける印象とムージルの批評を重ねて解釈すればよいのかどうか、判断がつかない。そうした問題点を残しつつも、ムージルの演劇批評はムージル文学の大きな部分を形成していることを本研究により確認したので、出版に向けた作業を進める。この作業と並行して、ム

ージルの劇評についての個々の考察については、論文として公表を継続する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

1. 長谷川淳基「ローベルト・ムージルのウィーン演劇批評について ハンス・シュティフテッカーとアントン・ヴィルトガンス批判」『椋山女学園大学研究論集(人文科学篇)』、査読なし、第46号、2015年3月、P53~68

2. 長谷川淳基「ローベルト・ムージルのシェークスピア批評 アルフレート・ケルの影響について」『椋山女学園大学「人間関係学研究」第13号、査読なし、2015年3月、P. 81~94

3. 長谷川淳基「ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル マックス・ラインハルト演劇への批評について」『椋山女学園大学研究論集(人文科学篇)』、第45号、査読なし、2014年3月、P57~72

4. 長谷川淳基「ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル 『モスクワ芸術座』批評」『椋山女学園大学研究論集(人文科学篇)』、査読なし、第44号、2013年3月、P45~60

5. 長谷川淳基「ローベルト・ムージルの演劇批評 『ロシア演芸』と『モスクワ寄席』」『椋山女学園大学「人間関係学研究」第11号、査読なし、2013年3月、P25~31

6. 長谷川淳基「ローベルト・ムージルとアルフレート・ケル リヒャルト・ベア ホフマン:『シャロレー伯爵』批評について」『椋山女学園大学「人間関係学研究」第10号、査読なし、2012年3月、P27~40

[学会発表](計1件)

長谷川淳基「ローベルト・ムージルの特性のある演劇批評」東海独文学会(於、名古屋大学)2014年7月12日

[図書](計1件)

長谷川淳基「ローベルト・ムージルの演劇批評 ビュヒナー作「ダントンの死」について」渡辺毅著『人間関係の諸問題』(中部日本教育文化会発行)所収、2013年3月、P165~187

[その他](計1件)

(書評)長谷川淳基「北島玲子著『終わりなき省察の行方 ローベルト・ムージルの小説』」『ドイツ文学』144号、日本独文学会、2012年3月

6. 研究組織

研究代表者

長谷川 淳基 (HASEGAWA, Junki)

椋山女学園大学・人間関係学部人間関係学科・教授

研究者番号: 40198718